

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32661

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H03968

研究課題名（和文）セルフ・ネグレクトの予防的介入と重度化防止に資する包括的ケアシステムモデルの構築

研究課題名（英文）Construction of comprehensive care system model of preventing Self-Neglect: for preventive intervention and prevention of severity

研究代表者

岸 恵美子 (KISHI, Emiko)

東邦大学・看護学部・教授

研究者番号：80310217

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、セルフ・ネグレクトの「予防的介入プログラム」および「重度化防止プログラム」を開発し包括的ケアシステムモデルを構築することである。

まず若年のセルフ・ネグレクトを把握するために全国の市町村障害福祉課を対象に障害者虐待およびセルフ・ネグレクトに関する質問紙調査を実施した。次に高齢のセルフ・ネグレクトの早期発見および重症度を測定するツールを開発するために、全国の地域包括支援センターを対象に質問紙調査を実施した。さらに高齢及び若年のセルフ・ネグレクトの支援者と当事者のインタビュー調査を実施し、結果を総合してセルフ・ネグレクトのアセスメント・介入ツールを精錬させプログラムの検討をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、若年から高齢のセルフ・ネグレクトへの移行を防止する「予防的介入プログラム」および高齢のセルフ・ネグレクトの重度化を防止する「重度化防止プログラム」を開発するための基礎調査を行い、セルフ・ネグレクトへの予防的介入と重度化防止という2つの観点から、地域共生およびコミュニティの再生を目指した包括的ケアシステムモデルを構築することである。

本研究の学術的意義は、セルフ・ネグレクト高齢者および若年者の実態と特性、早期発見・介入アセスメントツールをもとに、包括的ケアシステムモデルを構築し、セルフ・ネグレクトの早期発見・早期介入により社会的孤立・孤立死を防ぐことに貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop “Preventive Intervention Program” and “Prevention of Increasing Severity Program” of self-neglect, and to construct Comprehensive Care System Model.

In the first place, we conducted national questionnaire survey on abuse of disabled and self-neglect of disabled to welfare department of local agencies, to describe self-neglect of young adults. Then we additionally conducted national questionnaire survey to Community General Support Center for the purpose of developing tools for early detect of elder self-neglect and measure severity of self-neglect. Furthermore, we conducted interviews with supporters and elder and young individuals who self-neglect. From there results, we improve existing assessment tools and intervention tools of self-neglect by adding and removing items, then we discuss “Preventive Intervention Program” and “Prevention of Increasing Severity Program”.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：セルフ・ネグレクト 予防的介入 重度化防止 社会的孤立 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

セルフ・ネグレクトは高齢者だけの問題ではなく、いわゆるゴミ屋敷や精神障害等に起因するセルフ・ネグレクト等、若年者でも大きな問題であり、実態を把握することが喫緊の課題である。しかし若年者への医療・保健・福祉制度は縦割りであるため、若年セルフ・ネグレクト全体の実態を解明することは、時間を要するだけでなく、コロナ禍においては情報が得られにくく困難である。そのため、今回は、障害者虐待防止法におけるセルフ・ネグレクトへの対応について市町村障害福祉課の認識を把握すると共に、障害者のセルフ・ネグレクト事例から今後の予防・介入の課題を明確にすることを目的とした。

研究者らが開発したセルフ・ネグレクト事例に対するアセスメントツール、および支援ツールの項目は、高齢のセルフ・ネグレクト事例や、不衛生な家屋に住むセルフ・ネグレクト事例の分析から抽出した項目であり、若年のセルフ・ネグレクト事例や多様なタイプのセルフ・ネグレクト事例にも適用可能なものに精錬させる必要があり、支援ツール項目の精度を高め、有用な支援ツールの開発が急務であると考えた。

障害者虐待防止法の施行に伴い、近年障害者のセルフ・ネグレクトが大きな課題となっている。障害者虐待防止法にセルフ・ネグレクトは規定されていないが、高齢者虐待防止法と同様に、厚生労働省の『市町村・都道府県における障害者虐待防止と対応の手引き』や自治体が作成する障害者虐待防止マニュアル等でも、市町村の障害者虐待主管課(障害福祉課)が対応すべきとなっている。障害者のセルフ・ネグレクトは、若年セルフ・ネグレクトの中核であるとも考えられるが、その実態は明らかにされていない。また障害者虐待防止法の観点から障害者のセルフ・ネグレクトを明らかにした研究はなく、本研究は今後の若年者のセルフ・ネグレクトの予防・介入方法を考える上で先駆的な意義がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、若年から高齢のセルフ・ネグレクトへの移行を防止する「予防的介入プログラム」および高齢のセルフ・ネグレクトの重度化を防止する「重度化防止プログラム」を開発するための基礎調査を行い、セルフ・ネグレクトへの予防的介入と重度化防止という2つの観点から、地域共生およびコミュニティの再生を目指した包括的ケアシステムモデルの構築を検討することである。

本研究はセルフ・ネグレクト高齢者および若年者の実態と特性、早期発見・介入アセスメントツールをもとに、包括的ケアシステムモデルを構築し、セルフ・ネグレクトの早期発見・早期介入により社会的孤立・孤立死を防ぐことに貢献するものである。

3. 研究の方法

まず若年のセルフ・ネグレクトを把握するために全国の市町村障害福祉課を対象に障害者虐待および障害者のセルフ・ネグレクトに係る質問紙調査を実施した。次に高齢のセルフ・ネグレクトの早期発見のためのツールおよび重症度を測定するツールを開発するために、全国の地域包括支援センターを対象に質問紙調査を実施した。さらに高齢及び若年のセルフ・ネグレクトの支援者と当事者のインタビュー調査を実施した。それらの結果から、すでに作成したセルフ・ネグレクトのアセスメントツールおよび介入ツールの修正・追加を行い精錬させ、「予防的介入プログラム」および「重度化防止プログラム」を検討した。

4. 研究成果

1) 若年のセルフ・ネグレクトに関する悉皆調査

障害者虐待防止法におけるセルフ・ネグレクトへの対応について市町村障害福祉課の認識を把握すると共に、障害者のセルフ・ネグレクト事例から今後の予防・介入の課題を明確にすることを目的として、全国の市町村障害福祉課(1724 か所)に障害者虐待および障害者のセルフ・ネグレクトに係る認識や対応・課題に関する悉皆調査(質問紙調査)を実施した。調査内容は市町村障害福祉課におけるセルフ・ネグレクトの対応、とセルフ・ネグレクト事例として代表的な事例を2事例回答してもらった。結果として計460件の回答が得られ、回収率は26.4%であった。

2) 高齢のセルフ・ネグレクトに関する悉皆調査

セルフ・ネグレクトの重度化の防止、セルフ・ネグレクトの予防と重度化防止を可能とするケアシステムモデルの構築の基礎資料とするために、高齢のセルフ・ネグレクト早期発見のための

ツールと、生命の危険が及ぶ前の早期介入支援を判断するセルフ・ネグレクトの程度を測定するツール(重症度を測定するツール)を開発することを目的に実施した。調査内容は、地域包括支援センターが管轄する地域の状況、担当しているセルフ・ネグレクト事例の属性、把握時の状況、介入後の状況、心身の状況、日常生活の状況、対応・支援方法などとした。全国の地域包括支援センターを対象に調査を実施し、合計 1,353 件の回答があり、回収率は 26.7%であった。

3) セルフ・ネグレクト事例への支援者インタビュー

研究者らが開発したセルフ・ネグレクト事例に対するアセスメントツール、および支援ツールの項目について、さらに精錬させるために、セルフ・ネグレクト事例の支援経験のある専門職にインタビュー調査を実施した。

研究者らが開発したセルフ・ネグレクト事例に対するアセスメントツール、および支援ツールの項目は、高齢のセルフ・ネグレクト事例や、不衛生な家屋に住むセルフ・ネグレクト事例の分析から抽出した項目であり、若年のセルフ・ネグレクト事例や多様なタイプのセルフ・ネグレクト事例にも適用可能なものに精錬させる必要があり、支援ツール項目の精度を高め、有用な支援ツールの開発が急務であると考えた。

研究対象は、セルフ・ネグレクト事例の支援経験がある専門職のうち、地域包括支援センター、障害者相談支援センター等に勤務するセルフ・ネグレクト事例の支援経験のある専門職のうち、複数の終結した事例を支援した経験のある者とし、機縁法で対象者を選定した。研究方法は、半構成的面接法を用いた質的帰納的研究とした。対象者に事例を想起してもらい、事例の概要、アセスメントの実施時期とその内容、支援の実施時期とその内容についてインタビューを実施した。調査期間は令和 3 年 7 月～令和 4 年 3 月であった。結果として 7 名の対象者にインタビューを実施し、高齢のセルフ・ネグレクト事例について 4 例、若年のセルフ・ネグレクト事例 3 例の計 7 例について語ってもらうことができた。

4) セルフ・ネグレクトから回復した当事者へのインタビュー

重度化防止と予防的介入のプログラムの開発を進めるために、有効なアセスメントや支援のプロセスの検討が必要と考え、セルフ・ネグレクトである当事者のインタビューを実施した。研究対象は高齢及び若年でセルフ・ネグレクト状態から改善した当事者とし、支援者を介して機縁法により選定した。研究方法は半構成的面接による質的帰納的研究とした。インタビューは、どのようなプロセスでセルフ・ネグレクトに陥ったのか、支援者のどのような支援がきっかけで改善したのか、今後どのようなサービスや支援があれば良いのか、などであり、結果としてセルフ・ネグレクトの当事者 7 名に実施した。調査期間は令和 5 年 2 月～令和 5 年 3 月であった。

5) アセスメントツールおよび介入ツールの修正・追加とプログラムの検討

地域包括支援センターを対象に実施した高齢のセルフ・ネグレクトに関する調査結果とセルフ・ネグレクト高齢者の支援者へのインタビュー調査の結果を踏まえ、すでに作成した高齢のセルフ・ネグレクト事例の重度化防止をはかるアセスメントツールおよび介入ツールの修正・追加を行い精錬させた。また、自治体の障害福祉課に実施した若年のセルフ・ネグレクトに関する調査結果と若年のセルフ・ネグレクト事例への支援者のインタビュー調査の結果を踏まえ、高齢のセルフ・ネグレクトへの移行を予防する介入ツールを検討した。さらに高齢及び若年のセルフ・ネグレクトの支援者と当事者のインタビュー調査の結果から、すでに作成したセルフ・ネグレクトのアセスメントツールおよび介入ツールの修正・追加を行い精錬させ、「予防的介入プログラム」および「重度化防止プログラム」を検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岸恵美子	4. 巻 64(12)
2. 論文標題 【コロナ禍における女性と家族が抱える問題】孤立し生きがいを失う高齢者	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健の科学	6. 最初と最後の頁 810-815
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岸 恵美子, 坂本 美佐子, 望月 由紀子, 渡辺 昌子, 今村 晴彦, 上地 賢, 野尻 由香, 浜崎 優子, 吉岡 幸子, 下園 美保子, 野村 祥平
2. 発表標題 地域包括支援センターが対応したセルフ・ネグレクト事例の状況 事例の把握時と関わり後の状況の比較
3. 学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸 恵美子, 小長谷 百絵, 渡辺 昌子, 浜崎 優子, 今村 晴彦, 野村 祥平, 上地 賢, 坂本 美佐子, 望月 由紀子, 野尻 由香, 下園 美保子, 吉岡 幸子
2. 発表標題 地域包括支援センターが対応しているセルフ・ネグレクト事例の実態
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸 恵美子
2. 発表標題 ネグレクト 認知機能の低下があるセルフ・ネグレクトの人への支援の課
3. 学会等名 第23回日本認知症ケア学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今村 晴彦, 岸 恵美子, 小長谷 百絵, 浜崎 優子, 望月 由紀子, 坂本 美佐子, 渡辺 昌子, 吉岡 幸子, 野尻 由香, 下園 美保子, 野村 祥平, 上地 賢, 川北 稔
2. 発表標題 セルフ・ネグレクトにおける孤立事例の把握とソーシャル・キャピタルの関連
3. 学会等名 第93回日本衛生学会学術総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野村 祥平, 岸 恵美子, 上地 賢, 川北 稔, 渡辺 昌子, 吉岡 幸子, 小長谷 百絵, 浜崎 優子, 野尻 由香, 下園 美保子, 今村 晴彦, 望月 由紀子, 坂本 美佐子
2. 発表標題 若年者のセルフ・ネグレクトに関する実態と今後の課題：全国の区市町村障害福祉担当課への悉皆調査の概要
3. 学会等名 日本高齢者虐待防止学会第18回足立大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小長谷 百絵, 岸 恵美子, 浜崎 優子, 渡辺 昌子, 吉岡 幸子, 野尻 由香, 下園 美保子, 望月 由紀子, 坂本 美佐子
2. 発表標題 セルフ・ネグレクトの重症度を示す状態像の特徴：地域包括支援センターを対象とした全国調査の分析より
3. 学会等名 第42回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浜崎 優子 (HAMAZAKI Yuko) (00454231)	佛教大学・保健医療技術学部・教授 (34314)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小長谷 百絵 (KONAGAYA Momoe) (10269293)	上智大学・総合人間科学部・教授 (32621)	
研究分担者	野尻 由香 (NOJIRI Yuka) (10407968)	国際医療福祉大学・大学院・准教授 (32206)	
研究分担者	川北 稔 (KAWAKITA Minoru) (30397492)	愛知教育大学・教育学部・准教授 (13902)	
研究分担者	吉岡 幸子 (YOSHIOKA Sachiko) (40341838)	帝京科学大学・医療科学部・教授 (33501)	
研究分担者	今村 晴彦 (IMAMURA Haruhiko) (40567393)	長野県立大学・健康栄養科学研究科・准教授 (23603)	
研究分担者	望月 由紀子 (MOCHIZUKI Yukiko) (70440253)	東邦大学・看護学部・准教授 (32661)	
研究分担者	坂本 美佐子 (SAKAMOTO Misako) (80807280)	東邦大学・看護学部・講師 (32661)	
研究分担者	渡辺 昌子 (WATANABE Masako) (90405613)	東邦大学・看護学部・助教 (32661)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下園 美保子 (SHIMOZONO Mihoko) (90632638)	大和大学・保健医療学部・教授 (34453)	
研究分担者	上地 賢 (UECHI Ken) (90802520)	東邦大学・健康科学部・講師 (32661)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関